HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第13号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2011-02-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73498
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_13.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第13号
No. 13
February, 2011

【特集1】8人の女たち
【特集2】オープンアクセスイベントレポート 3連発
・あなたのお仕事何ですか？

創刊 1周年

2月某日、8人の女性が集い、
オンライン座談会を決行！
女たちが語るコンテンツ収集の
取り組みとは？

座談会メンバー
①リポジトリでどんな業務してる？
②リポジトリ以外の本業は？
（画像左上から右回り）

●南絵里子(小樽商科大学)
①先生方への登録依頼(新任教員説明会時、随時、研究室訪問時等)/出版者等への著作権確認/登録/リポジトリワーキンググループの主査(ワーキングの調整業務)
②ILL 雑誌、EJ、DB、図書館主催の市民講座、貴重図書展示会等の企画運営

●山田奈々(青森県立保健大学)
①基本的に 1 人で担当しているので全般。サーバー管理は業者、リポジトリシステムは(XooNIps 研究会の方にお聞きしながら)なんとか自力。
②正規職員 2 名の小さな職場なので図書中心に全般。

●菊池美紀(聖学院大学)
①主に企画、広報、他課との調整。登録資料を集めてくるのが一番の使命。実際の登録とシステムの保守はパートさんと情報推進課の職員が担当。
②カウンター/オリエンテーション/予算管理/書類作り/展示企画…小さな図書館なので何でもあり(本の受入と雑誌の受入だけが違うかな)。最近は『論叢』(聖学院大の紀要)にまで手を染めてしまいつつあり…

●佐藤晋巨(聖路加看護大学)
①コンテンツ発掘～登録まで一通りの業務。教員業績も入れているので、年度末から年度始にかけては業績登録関連が主に。保守は外注。人数の少ない職場なので、年間を通じてリポジトリ業務を行なうのが難しく、秋から冬の季節限定労働になる。
②利用者教育（ガイダンス、授業支援、個別相談）が主で、週 1 日、市民に開放している「るかなび」という分館で市民ボランティアさんと一緒に業務。3 月の図書館システム入替があるので、そちらがメインになりつつあり…。

●中請真弓(広島市立大学)
①システム系以外のリポジトリ業務を一通り担当（共同リポジトリに参加しているためシステム系はそちらで)。
②メインは契約＆経理担当で、その他、目録業務以外は一通り担当。心の中でのメインはリポジトリと利用者教育^^(※人数が少ない職場なので…)

●市原瑞基(宮崎大学)
①機関リポジトリ/遺跡リポジトリの業務全般(ただし、データ登録は派遣さん)。昨年までは、主に、広報資料作成/学会・出版社に対する著作権確認/登録。10 月からデータ登録以外の全般を担当。
②資料管理係電子コンテンツ担当として、リポジトリの他、電子リソース整備、図書館システム運用、目録など。EJ の価格高騰からリポジトリ/オープンアクセスに興味を持ったクチ。

●福嶋さや子(琉球大学)
①論文の許諾伺いから登録公開までの業務。
②リポジトリ業務がメインであるものの、カウンターに出ての利用者対応や図書館で行う展示会などの企画準備等も。

●門間泰子(福島大学)
①通常はリポジトリにノータッチ。何か作戦を練る時/人海戦術が必要な時のみ参加。ふだんは管理系の主担当者がひとりで業務。
②サービス系＝窓口業務に関する雑用全般。季節業務はリテラシー教育。

●聞き手：阿部潤也(東京歯科大学)
①すべてです。気が向いたらタマにインタビューとかも。
②利用者サービス全般。あとは副業でネットワーク管理も。「メールが届かない」「ウェブが見られない」「ウィルスがー！」とか(笑

お題「リポジトリの最優先課題、コンテンツ収集で工夫していることは？」

全員：こんばんはー。よろしくお願いします。

―――：コンテンツ収集について、工夫している点を南さんからお聞かせください。
南：小樽商科大学では昨年 7 月から、全教員を対象とした年 1 回の研究室訪問（御用聞き）を始めました。研究室訪問で、まだいただいていない抜き刷りや著書などを、まとめていただくということをしています。一方、新しい論文が出るたびに、窓口に持ってきてくださる先生もいらっしゃいますので、うれしく思います。
中請：広島 WS の時にもそのお話を伺いましたが、ほんとすごいですー。うらやましい。やりたいです。
佐藤：御用聞きはお一人でやっているのですか？
南：本学は、教員ひとりひとりに担当者が 2 名つくマンツーマン体制をとっているのですが、担当者 2 名と時間があえば課長も同行してくれます。
ただ、全教員はまわれてなくて、7 月末から開始して今のところ 50 名程度です。
山田：訪問のタイミングはどのように決めていらっしゃいますか？本学は実習が多いので、それを避けつつの日程調整ですと、なかなかタイミングがつかめません。
南：訪問のタイミングは、各自が教員とコンタクトをとって教員の都合の良い日時で決めますが、先生方は中々お忙しそうで、アポをとるのが難しいです。
中請：訪問の内容は「機関リポジトリ」だけで依頼するのですか？
南：依頼時には論文等を寄贈していただく、というのもお願いしていますが、それだけではなく図書館へのご意見ご要望も伺いたいということで、訪問をお願いしています。

―――：山田さんはいかがですか？
山田：青森県立保健大学は、今はまだ、紀要、科研費や学内研究費報告書と登録を進めてきた次の段階で、教員データベースから論文をリスト化して提供依頼をしているところです。工夫している点はまだないので、是非皆さまの事例を参考にさせていただきたいと思います。
中請：先生との個別のやり取りはされていますか？
山田：立ち上げる直前に、図書館委員の先生にお願いして、インタビューをさせていただきました。先日はリストをお送りした先生から打ち合わせに呼んでいただきました。それ以外はまだです。
中請：えー、それはすごい。
菊池：貴重な一歩ですね！
中請：最初っからインタビューですか！
山田：その頃、小樽商大さんのインタビューが話題になっていたので、早速真似させていただきました。リポジトリに対する抵抗感みたいなものを伺いたかったので。それは案外無いということが分かり、ほっとしました。また、依頼はメールでしています。分量が多いと悩ましいのですが。
中請：個別のやり取りの時、どういう姿勢で臨まれているのか、皆さまに是非お尋ねしたいところなのです。ぐいぐいっと結構強めに強引なアプローチなのか、まずは下手に出てみるのか。
南：強引にお誘いはしてないですねぇ。イヤだったらしょうがないかと。
山田：まだお互いに手探り状態だと思いますので「私は先生のお役に立ちたいんです！」という気持ちを伝えるつもりで。
中請：あ、それ、すごくいいですね！
門間：「私は先生のお役に立ちたいんです！」このセリフいいですね。ウチの大学に持ち帰ろう。。。
福嶋：提供依頼に対する回答もメールで受けていますか？あと、OK が出た論文ファイルはどのようにいただいていますか？
山田：回答もメールです。「登録許諾書兼チェックシート」がエクセルファイルなので。確かこの様式は琉球大学さんのものを真似させていただきました。ファイルも添付されることが多いですが、大きいときは直接持ってきてくださる先生もいらっしゃいます。
佐藤：依頼状況とか、どのように管理していますか？エクセル？？
菊池：状況の管理は、私たちも課題です。
山田：エクセルですね。
南：うちもエクセルです。
佐藤：やっぱりシンプルが一番と？
山田：単にそれ以外の方法が思い当たらないからですね。
福嶋：紀要ごとにエクセルを作成して、返事内容で色分けをして管理をしています。
福嶋：琉球大学は、まだ雑誌論文まで中々手が回っていない状態です。紀要や科研費報告書の依頼は先生ごとにメールで行っていますが･･･。
菊池：お返事、どれくらいの割合で返ってきますか？
福嶋：何度もしつこいくらい再送メールを送ったりして何とかですね。文系の先生のほうが回答率はいいですよ。
菊池：お返事率は、先生との関係にも影響されますね。
山田：再送メールのタイミングが、これまたつかめず･･･。どのようにされていますか？
福嶋：大体、2～3 か月空いたらそろそろ･･･といった感じでしょうか。あと、新しい紀要が出た際に過去の分と一緒にお伺いしたりしています。
市原：宮崎大学では、以前はメールで先生に打診していましたが、返信がない先生への再送はしていませんでした。論文 DB をチェックして新しいものが出る都度、先生に送っていたので、先生が気にしてくれた時に合わせてお願いしていました。
中請：「新しいものが出る都度」ってすごいですね。情報が自動で流れてきたりする仕組みがあるのですか？
市原：SCOPUS という DB の機能を使っていました。
福嶋：うらやましいです。うちは紀要が図書館に寄贈されるタイミングで着手するのでその時に過去の分もチェックしています。
佐藤：日本語の DB もアラートできるようになると助かりますね。医中誌とか所属機関で検索すると一網打尽とか。
山田：いいですねー！
中請：うちも同じですねー、福嶋さん。市原さんのとこのがうらやましい。
南：うちも DB 契約してないので、うらやましいです。
市原：DB 高いですものね（泣）。ただ、今は先生から自主的に論文をいただく流れを作っているところで、個別に依頼することはしていないです。

―――：門間さんはいかがですか？
門間：福島大学刊行の紀要は、投稿規程にリポジトリ公開について一筆入れてもらいました。新しい紀要の刊行と一緒に PDF をいただくことになっています。ただ、遡及分はやはり個別に依頼ということになるので、途中で頭打ちになっています。次なる目標は修士論文。
福嶋：うらやましいです。PDF でいただけると作業効率がだいぶ変わりますよね。
菊池：私のところも紀要掲載論文は、基本的に PDF 化、リポジトリ登録を原則としてもらいました。そのため、図書館が紀要の編集・発行にかなり関わっています。
門間：制度化については、やっぱり編集委員会ともめたりもめなかったり。。。図書館としては入れてほしくなかった「原則」公開の文章が入ってしまった学類もあります。あと、リポジトリより以前に科研費全文 DB で許諾をいただいて公開していた報告書があるのですが、リポジトリに移行時に、なぜか全文 DB は OK だけどリポジトリは×という先生もいらしたりして。
南：科研費全文 DB というのがあるのですねー。
中請：もしかしてその DB は学内限定公開とか？
門間：いえいえ、普通に Web 公開です（笑）
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/kakenhi/kakenDB.html
中請：へえ～。じゃあなんでリポジトリを×にするのでしょうね。不思議ですね。
佐藤：わ、ホントに全文公開されている。すごいですねえ。これもリポジトリ！？
門間：Google でヒットするのは同じだから！と説得するよう主担当に勧めたのですが、うまくいかなくて。なかなかこのページを終了できないという。。。
中請：それって許諾いるものなんですかねー。「移しました」じゃ、ダメなんですか？
菊池：DB 統合しました！とか。科研費 DB の管理はどちらが･･･？
門間：全文 DB はリポジトリ始まる前から ILL（Web サイト）担当者が管理していて、新しいのはリポジトリに統合ね！とやれたのですが、今までの蓄積分がうまくいかなかったんです。

―――：菊池さんはいかがですか？
菊池：そうですね。聖学院大学では、先ほども言いましたが紀要発行時にそのまま登録してしまうというのがベースになっています。それを他の学内発行物に広げようとしているのが1つ。それ以外としては、学内発行物の遡及分について、リストを作成しておいて、図書館にいらした先生にカウンターで承諾をいただくという･･･。「サインでいいです！」って。
山田：おお！
佐藤：うっかりカウンターに寄ったら･･･という感じですね。
菊池：ただし、先生のお顔と名前、リストが頭に入っていないと探しているうちに逃げられる･･･（苦笑）。カウンター担当者の協力と連携が重要です。
中請：こういう話、聞きたかったんです！
山田：共著者の許諾確認が面倒で、と言われることが多いのですが、共著者の処理はどのようにされていますか？
菊池：それは、その場で貰えないので困りますね。実際、一度持ち込まれた 1 冊の本ですが、共著者の許諾を貰ってきてください、と言ったら、そのまま約 1 年･･･というケースがあります。先生から持ち込んでもらったのに！
門間：共著論文は頭が痛いですよね。
福嶋：うちでも共著者の許諾取るからと言って、放置状態のものが何本かあります。
菊池：そう、原則は「許諾を取って」なんだけど、聞くと先生方は正直で「そうなんだ～」って。そうすると受け取れないですよね。

―――：聖路加看護大学での取り組みはいかがですか？佐藤さん、お願いします。
佐藤：論文は、教員が業績を自分でリポジトリに登録することに、昨年度からなったので、その中からメボしいものを見つけてお声をかける場合。あとは、先生が結構自分であげていたりします。月間のダウンロード件数が多いとそれだけ必要とされているなら、もっと全文アップしようかしら、という具合で。
門間：いい連鎖ですね～。
中請：先生方はダウンロードの件数をどうやって知るのですか？
佐藤：ダウンロード件数は、メールで月初めに筆頭著者の先生に自動配信しています。
中請：ダウンロード件数通知メール、前向きに検討します！
佐藤：博士論文も来年度から 1 年後に全文公開が必須になりました。
菊池：博論の公開を必須にするのは目標です！いいな～。
佐藤：2 年越しです。何度も会議にかけて貰って。
菊池：おお！うちはまだ 1 年。もうちょっと頑張ります。
佐藤：あと 1 年ですね :)
南：ダウンロード件数通知メールは本学も行っていますが、先生方からかなり反応がありますね。博論は、本にするとかそういう予定があるとリポジトリに載せたくないとかいう人はいないんですかね。
菊池：もう本になったので、博論は公開しないというのはありました。
佐藤：1 年以内に出版公表と決まっているのですが、皆さん中々公表がすすまないので。
福嶋：博論で雑誌に一部を投稿されている場合もあるかとは思いますが、その場合でも全文公開可能ですか？
佐藤：投稿するとき、分断して編集し直すようなので、全文公開大丈夫かなと考えています。出版社の許諾を取る場合は相談に乗ります、というスタンスです。
菊池：ダウンロード件数通知メール、自動でできるのはいいですね。うちは手動です。
山田：ダウンロード件数通知メールは、DSpace の機能でしょうか？
（編集部注・DSpace による機能ではなく、各大学によるカスタマイズです。）
南：うちは DSpace です。
佐藤：うちも DSpace で自動メールしています。
菊池：XooNIps にもその機能ほしいな～。あったりします･･･？
山田：あったら使っていると思うので、ないと思います。XooNIps もできるといいですねー。
菊池：ホントに。
中請：前に、ダウンロード件数をお知らせしたら「えっ、たったそれだけ？」という顔をされて、こちらもがっくりしちゃったんですよ。本の貸出だったらその数はありえないんだけど、やっぱり少なく感じたみたいで･･･。
菊池：期待が大きかったんですね。
中請：そうみたいです。それ以来、何件ぐらいだったら、知らせたら喜んでもらえるのかなぁとか不安になっちゃって。
菊池：ランキングにしちゃうと件数だけではなくなるのでいいかもしれませんよ。
佐藤：確かに。件数だけだと自分のダウンロード数が多いのか、少ないのか分からないから、DL の基準値はどのくらいなの？と聞かれて慌てたことがあります。
山田：ランキングは、うちでは反対があったので公開していません。
菊池：反対理由は？
山田：論文の閲覧数を順位付けするものではない･･･というご意見でした。
福嶋：うちは逆にこんなに見られているとは、と及び腰になられたことがあります。特に海外からの閲覧があったのが意外だったようです。

―――：件数通知の効果も様々ですね。それでは中請さん、お願いします。
中請：広島市立大学ではあまり工夫と呼べることはないですね･･･。2 月にようやく登録件数が 1000 件突破したので、初インタビューをして、館報の号外を出す予定です。そこに、ダウンロード数も載せてみようかと思っています。年間トップ 10 を、ダウンロード数と論文タイトルだけ公開して。
菊池：1000 件突破おめでとう！
中請：ありがとうございますー。ようやく、ようやくです。
福嶋：突破おめでとうございます！きりのいい数字が近づくとやる気が一層出ますよね
南：インタビュー楽しみです♪
山田：号外発行も、すごいですね！
市原：号外が出ることでその論文のアクセス数も増えるかも。楽しみですね。
中請：しまった･･･。何となくプレッシャー（笑）。
でも、先生とお話できるの、いいですね。
研究室訪問の良さを体感しました。

お題「リポジトリの最優先課題、コンテンツ収集で工夫していることは？」

8人の女たち

菊池：楽しいですよね。思わぬお話が聞けたりして。
門間：やっぱり対面でお話してみるの、いいですよね。
市原：ですよね。論文投稿の仕方とかも教えてくださった先生もいました。最初は何も知らなかったのでありがたかったです。
中請：インタビューはお話をお聞きするって感じだから、楽しくできるんですよね。でも、リポジトリのコンテンツ収集はどう出たものかと、未だにびくびくします。強引でいいのか、下手に出るべきか。おそるおそる。←何度もすみません。
菊池：強引な必要はないんじゃないでしょうか。「いかがですか～」みたいな感じで。
中請：ふむふむ。
佐藤：うちで季節ものの論文があって、夏になると、老人の脱水症状の論文がダントツ利用されるのです。「公開するといろんな人の役に立つみたいだから先生、論文をください」という感じでは？
菊池：いいですねぇ。「今です、先生！」みたいな感じで。
佐藤：冬は「乾燥対策」系とか。
市原：宮崎大学は、先生のためのリポジトリです、という姿勢で臨んでいます。タイミングをはかる、というのもいいですね。
南：「先生のためのリポジトリ」いいですね。
市原：あとは、先生の負担にならないことを強調しています。
福嶋：琉球大でも許諾伺いをメールに変更したのには、先生の負担を減らすということがあります。これに返信していただくだけでいいですよと。
佐藤：大事ですね。
南：先生の負担にならないことも大切ですよね。先生方は面倒くさがりですから。
中請：なるほど、ほんとそうですね。
山田：そうですよね。そして、どこまで代行するか、悩みます･･･。
門間：人手は限られていますものね。
佐藤：逆に先生から「そこまでやらなくても」と心配されたりすることも。
中請：確かに。自分の首を絞めることにはなりますものね。でも、コンテンツが増えるとうれしい。
佐藤：そうそう。加減が大事ですね。
市原：実はほとんど代行しています。共著者の許諾は先生に取って貰っていますが･･･。確かに首絞めてます(笑)
菊池：最初はやれますね。でも続けられるかが課題です。セルフアーカイブの道は遠い。
中請：遠い遠い。そして、担当者の温度差もあるように思います。立ち上げ時の担当と、その後、引き継がれていく担当とではテンションが違う、のではないかと思うので。
菊池：そうかもしれませんね。でも続けられるものにしていかないと･･･。
市原：代行登録メインに変えてから、コンテンツ収集にかける比重は少なくなりました。セルフアーカイブが理想ですが、代行登録は、先生の秘書と思ってやっています。

―――：福嶋さんはいかがですか？
福嶋：琉球大学では遡及分は地道にメールですが、これから出すものについてはだんだん制度が整ってきました。紀要については大部分が出版と同時に登録が可能ですし、博論については学位申請の書類一式に登録許諾書を入れて配布して貰っています。
門間：学位申請書類一式と一緒！は効果ありますよね。
中請：順調だー。そうですよね、制度が整えば、個人的な依頼のテンション(？)は問題にならない。
市原：博士論文は学部の教務の協力があるとすごく助かりますよね。
福嶋：院生にはなかなか後から許諾伺いなどできないので、大学にいるうちにコンタクトをと考えた結果です。まだ全ての研究科で配布して貰ってはいないのですが、それでも助かります。
南：博論は、指導教員の許諾は取られていますか。
佐藤：学位論文はタイミングが大事ですよね。論文の審査完了から修了式までの間が短いので、ちゃちゃっと書類を出していってもらわないと。
福嶋：指導教員の許諾はこちらからは取ってはいません。
市原：博士論文は収集対象になっているので、特に指導教員の許諾が必要とはうたっていません。図書館が知らないところで打ち合わせているかもしれませんが。
南：なるほどです。
中請：うちはまだ一件もオッケーが出てないんですよ！なぜかみんなしぶっちゃって。。。
福嶋：おそらく修士論文の場合には指導教員の許諾も必要かと思います。
菊池：確かに。うちも博士は基本的に本人のみ。修士は指導教員の許諾が必須です。
南：うちはまだ1件だけ･･･。
山田：うちもまだです。リポジトリ以前から、許諾依頼だけはしていたのですが。
菊池：準備いいですね～。
佐藤：段取り良いですね。
山田：気持ちだけ。
菊池：大事です。
中請：南さん、その1件があるのとないのとでは大違いですよ！1件目になるというのも、ちょっと気負われる部分なので。
菊池：指導教員から推薦してもらうとかできませんか？いい論文だから公開しなさい、みたいな。
市原：それいいですね。図書委員の先生に頼んでみるとか。
南：ありがとうございます。ただ、1件の修論のダウンロード件数がけっこう多いんです。
菊池：と言う、うちもまだ公開は1件。現在2009年度分で了解が出たのを準備中です。
中請：一度、指導教員の推薦でトントン拍子に進んで、説明時には本人も乗り気だったのに、時間が経って、流れてしまった･･･。なんなんでしょうね、この壁の厚さ。それで、待っているだけじゃだめなのかな、多少強引にオッケーもらったほうがいいのかなとか思ったりしているのです。

―――：最後に宮崎大学の取り組みを教えてください。市原さん、お願いします。
市原：宮崎大学では、先生は図書館に別刷を送っていただければ OK で、あとは図書館が代行登録する、という形に変えました。そのため、ご自分から論文を送ってくださる先生が増えました。もう少し広報が必要かなとは思いますが･･･。論文は現在、紙で管理しています。著作権で本文の登録ができないものもあるので。あと、登録したデータを大学情報 DB に流用しています。
南：大学情報 DB との連携は気になるトピックです。
山田：DB との連携は私も気になります。DSpace が連携は進んでいるイメージがありますが、それも DSpace の機能でしょうか？
市原：いえ、連携システムを CSI 委託事業で作りました。研究室訪問の際、そうなるといいな～という話が複数出ました。
南：大学情報 DB への入力は手動ですか？
市原：連携する先生の情報をリポジトリに登録し、連携システムでコマンドを打ち込んで大学情報 DB にデータを流す、という形だったと思います。
南：すばらしいですねー。
山田：そういう形を目指したいです。
市原：CSI 委託事業費と前任者のおかげです。同じデータを使っているのであれば、と。大学情報 DB とリポジトリのデータが同じなのにまた登録するのもね～という先生のもっともな意見がきっかけですね。
佐藤：リポジトリに入れさえすれば、色々データが流用できると良いですね。
菊池：一度入れたデータを上手に使い倒す、先生にとっても、私たちにとっても優しいですね。

8人の女たち【二次会編】

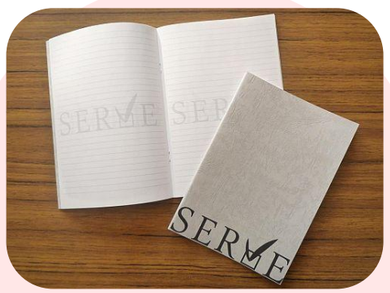
怒涛の「女子会」パワーにより、座談会はひとつのお題で2時間盛り上がりました。
もう少し聞きたい、話したい…翌日は有志による二次会を開き、グッズを中心に語り合いました。

リポジトリキャラ「あおばとちゃん」広報グッズの数々。貸出用のビニール傘は、図書館サービス研究所の2009年図書館グッズ展示会で1位に選ばれたことも。「あおばとちゃん」は、小樽市「潮まつり」にも、うちわで登場！

小樽商科大学

公開時に作成したうちわは、リポジトリの説明入り。配布用しおり全6種のうち一つにリポジトリURLを掲載。

琉球大学



罫線と透かしのロゴが入った「SERVEノート」。表紙の裏に登録方法の簡易ガイドあり。登録して下さった先生や、研究室訪問の際に配布。

聖学院大学

クリアファイル

ステッカー

封筒(表)

封筒(裏)

宮崎大学

青森県立保健大学
A-plus利用ガイド
http://a-plus.auhw.ac.jp/themes/a-plus/a-plus_guide.pdf

福島大学
FUKURO探検(利用ガイド)
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/shoto/shoto-pdf/no.41guide8.pdf

第8回 SPARC Japanセミナー2010

2月3日、国立情報学研究所 学術総合センターにおいて「日本の研究論文/学術誌は、世界でどのような位置にあるのか？」をテーマとして、文部科学省・阪彩香先生、国立情報学研究所・根岸正光名誉教授による講演と国立情報学研究所・安達先生を加えたパネルディスカッションが行われました。

「科学研究のベンチマーキング2010ー論文分析でみる世界の研究活動の変化と日本の状況ー 」阪彩香（文部科学省 科学技術政策研究所 主任研究官）

世界で増加している国際共著論文の動向に関する考察や、日本のTop10％論文数の伸び率低下とシェア減少について指摘があったほか、注目されている科学研究分野を視覚的に読み取れるサイエンスマップについても解説した。

「日本の学術論文と学術雑誌の位置付けに関する計量的調査分析ー日本の論文の『海外流出率』の動向を中心として」根岸正光（国立情報学研究所 名誉教授／SPARC Japan 運営委員長）

日本の論文における海外流出率に着目し、学術分野、収載雑誌などから調査分析された結果や、そこから読み取れる日本雑誌の国際化、そして臨床医学誌の海外流出率の低下(「日本回帰」と表現)についても解説した。

普段このような視点で学術雑誌を見ていなかった私には、提示されたデータ全てが興味深く感じられましたが、その中でも両氏が共通して言及された日本の臨床医学分野の動きについてが印象的でした。私立大学の健闘で論文数が伸び、かつ「日本回帰」に貢献している臨床医学分野ではありますが、この現象が示唆するものは何かと考えたときに、数値の裏にある日本雑誌の現状や問題点についても考えを広げることが出来ると感じました。

レポーター:東京歯科大学 鎌田美樹

DRF技術ワークショップin旭川(DRFtech-Asahikawa)

「今年は北海道でWSはやらないんでしょうか？」という道内機関のつぶやきに端を発して、DRFtech-Asahikawaが北海道の真ん中、真冬の旭川にて2月4日に開催されました。参加者数は延べ63人、旭川医大の研究者やリポジトリ未構築館からの参加もありました。

「日本の学術情報流通：機関リポジトリとオープンアクセス」三根慎二（三重大学）

自分の大学の教員を知ること、研究者の立場に立ってリポジトリのメリットを考えることが大切。各大学の実情に合わせたリポジトリ経営を目指すべき。

「旭川医科大学の機関リポジトリAMCoRについて」糸林真優子（旭川医科大学）

システムにXooNIpsを選択した経緯、コンテンツ集めの苦労話など。リポジトリ未構築館にとっては、より具体的なイメージが掴めたのでは？

「機関リポジトリに求めるもの」高草木薫（旭川医科大学）

リポジトリを介して研究成果を享受する側の情報を、研究者へ適切にフィードバックすることで、研究を発展させるシステムの構築を期待する。

「研究室訪問：いいとも作戦」城恭子（北海道大学）

先生から先生へとバトンをつないで研究室をご訪問する「いいとも作戦」を実施中。研究者の生の声をシステムへ反映させる取り組みも。

「研究室訪問：専属司書制度」長谷川奈々（小樽商科大学）

教員一人につき図書館職員二名が御用聞きを担当する「専属司書制度」を導入。教員と図書館職員との持続可能な信頼関係を目指す。

「出版者許諾情報の共有（SCPJ）」横井慶子（東京工業大学）

SCPJプロジェクトの概要、ちょっと便利な使い方など。「みんなでグレーを塗り替えましょう！」

午前の部では研究者の立場から見たリポジトリの意義について講演があり、フロア研究者との活発な意見交換が印象的でした。午後の部では事例報告のほか、DRF技術ワーキングメンバーからUsrComの紹介や可視性を高めるテクニックについてわかりやすく講義していただきました。ワークショップ全体を通して、リポジトリの運営には担当者と研究者の相互理解が第一であることを、改めて認識することができました。

レポーター:北海道大学 野中雄司、城恭子

オープンアクセス、サイバースカラシップ下での学術コミュニケーションの総合的研究

2月5日に慶應義塾大学において、倉田敬子教授（慶應義塾大学文学部）を研究代表者とする、研究成果報告会が開催され、さまざまな機関より総勢89名もの方が参加されていました。研究グループのメンバー11名が、それぞれ研究成果を報告する形式で進められ、各発表で活発な意見交換がなされていました。めまぐるしく進展する学術コミュニケーションの今後を考える上で、示唆に富む有意義な報告会でした。

「最初に海外学術雑誌に発表した日本人は誰なのか」上田修一（慶應義塾大学文学部）

欧米の雑誌掲載論文や記事から、自然科学・医学の発展期に、日本人研究者も遅れをとっていないことがわかる。また海外学術誌に論文が載った最初の日本人は長井長義、松本銈太郎と考えられる。

「日本における電子ジャーナルの発行状況」時実象一（愛知大学文学部）

2005年と2008年の調査を比較した結果、電子ジャーナルの発行状況は、1)J-STAGEでの発行が大幅に増加、2)海外出版社からの発行は約1割増加、3)和文誌の電子化率上昇といった傾向がみられた。

「MEDLINE収録の日本の医学系雑誌の電子化状況とインパクトの変化」林和弘（日本化学会、科学技術政策研究所）

MEDLINE収録誌の日本発行の医学系雑誌を調査した結果、1)MEDLINE搭載誌は電子化率が高い、2)電子ジャーナルプラットフォームは、国内ではJ-STAGEまたはJournal@rchive、海外はSpringerが最も多い、3)国内プラットフォーム利用誌のインパクトファクター急増、OA率の高さが判明した。

「オープンアクセスの進展と電子ジャーナルの利用統計」加藤信哉（東北大学附属図書館）

購読論文とOA論文が混在するハイブリッド型OAジャーナル、著者Webサイト、IRなど様々な形で論文公開が進んでおり、電子ジャーナルのタイトル単位での利用統計COUNTERとは別に、論文単位での利用統計作成を目指すプロジェクトPIRUSが始動している。

「大学図書館の提供雑誌が研究者の引用行動へ及ぼす影響」横井慶子（慶應義塾大学大学院）

大学図書館の提供雑誌が研究者の引用行動に影響を及ぼしていることは確認できなかったが引用論文数の増加、引用する雑誌のタイトル数増加、古い文献からの引用増加等の変化が確認できた。

「生物医学分野においてオープンアクセスはどこまで進んだのか：2005年、2007年、2009年のデータの比較から」森岡倫子（国立音楽大学附属図書館）

生物医学分野における、2005年、2007年、2009年発行論文をGoogleを用いて人手で調査した結果、OA論文は年々増加していた。OA実現手段はOA雑誌や有料雑誌のサンプル、エンバーゴなど雑誌のサイトでの公開だった。PubMedを用いた簡易検索ではGoogle検索とはOA率が異なった。

「オープンアクセス実現手段の新機軸：すべてはPubMedのもとに」三根慎二（三重大学人文学部）

OAが進展する生物医学分野では、PubMedやOA雑誌等のデータを用いた無料論文提供サイトが出現している。OAを実現するサイトの多くがPubMedとつながりがある。またPubMedは、メタデータを提供する点からも、生物医学分野のOAに大きな役割を果たしている。

「オープンアクセス化の進む医学論文が一般市民に読まれる可能性はあるのか」酒井由紀子（慶應義塾大学信濃町メディアセンター）

医学・医療情報の探索経験者は51.8%おり、探索主題は「病気」が、情報源は「インターネット」と「医師」が、入手した情報の影響は「安心感が得られた」が高かった。医学論文を読みたい人は56.1%いたが、健康医学情報の有用性等については更なる調査が望まれる。

「医学・医療情報源としての「一般雑誌」：10年の変化とその位置づけ」 國本千裕（駿河台大学メディア情報学部非常勤講師）

2000年と2009年の医学・医療分野の一般雑誌掲載記事を調査した結果、医学・医療の記事は少ないが、雑誌によっては掲載率が非常に高かった。また、医学・医療記事の多くは医学・医療専門家が執筆していた。

「”e-science”とは何か」松林麻実子（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科）

e-scienceとは、研究活動において大量データの収集および解析が中心となるような「データ主導の科学」のことである。典型的な例としてバイオインフォマティックスや天文学があり、データの共有や公開に向けての議論が始まっているか、または既にある程度実現している。

「日本の研究者にとって「情報共有」が意味すること：e-Scienceに向けての予備的調査結果」倉田敬子（慶應義塾大学文学部）

e-Science、Cyberinfrastructureが注目されてきている。e-Scienceを共同研究と情報共有に基づく新たな研究の展開と特徴づけ、共同研究の進度、情報共有に対する研究者の意識を調査した。その結果、1)データ共有は共同研究の特徴によって異なる、2)データの秘匿および公開において「データは自分のもの」と考える意識の影響が明らかとなった。

レポーター:東京工業大学/慶應義塾大学大学院 横井慶子

特集2 オープンアクセス関連イベントレポート3連発

あなたの
お仕事
何ですか?

医学中央雑誌刊行会

データベース事業部
松田真美さん

Twitter の
つぶやきは
iloveferry

私たちは、杉並区高井戸の住宅街にひっそりと居を構える「NPO 法人」で、医学とその周辺領域(歯学・薬学・看護学・など)の文献探索のためのデータベースサービス「医中誌 Web」の作成・提供を行っています。「医学中央雑誌」の創刊はなんと 1903 年、100 年以上の歴史を持つサービスです。2000 年にスタートした「医中誌 Web」は、現在、医科系大学などの教育機関、大中規模の病院、製薬企業など、約 2,100 機関でご利用いただいています。

仕事をして良かったと思うことは？

1 行で述べますと、「IT 革命を実体験できた、それも、医療への貢献、という大事なサービスにおいて」となります。私が入職した四半世紀前には、私たちのような小さい組織が自前でネットサービスを提供する、なんて、想像すらできませんでした。

冊子での情報提供の時代に比べ、医中誌の実利用者数は恐らく 2 桁以上増えていると思われます(医中誌 Web の一日の利用者数は、約 1 万 5,000 人)。インターネットの威力としか言いようがなく、今でもフトビックリする瞬間があります。

苦労していることは？

「良かったと思うこと」の裏返しです。情報環境が激変する中、どのような形でサービスをご提供していくべきか？悩みは枚挙に暇がありません。しかも、医中誌 Web は、「1コンテンツ・1プラットフォーム」「ドメスティックなサービス」「民間が主催」とのかなりユニーク？な存在となっており、内外にお手本を求めることが出来ません。(ですので、皆様のお知恵を拝借したい！共に考えていきたい！と心から思う次第です。)

今後の展望は？

必死に目を凝らしても、2、3年先のイメージすらぼやけている･･･と言うのが正直なところですが、なぜか気持ちは明るいのは、インターネットを通じて利用者の方々と繋がっている、との感覚があるからでしょうか？と言うことで、分からないながらも、押えて行きたいと考えていることを何点か述べます。

(1)「選択された、確実な情報を届ける」というデータベースの本来的な意義を忘れないこと。言い換えると、Google には出来ないが医中誌には出来ることとは何か？を深く考えた展開。

(2)「ポータル化」「パーツ化」のどちらの要請にも応える形を作ること。前者は、例えば規模の小さな病院などのご機関に対しては、論文の情報に加え、書籍の情報なども併せてご提供していくなど。後者は、大学図書館などで統合的なサービスを展開されたい場合は、API をご提供し、パーツとして振舞えるように、など。

(3)他サービスとのリンク、連携は引き続き拡大し、「行き止まり感の無いサービス」を目指す。

リポジトリ・OA の活動についてひとこと

機関リポジトリは、「インターネットの申し子」という意味で、同じ道、それも「道なき道」を共に歩むもの同士、と勝手に思っております。心境としましては、「手を繋いで共に歩みたい」と言うところです。また、「オープンアクセス」と言う点につきましては、基本インフラと言えるサービスを提供している以上、私たち自身も一つの目標として掲げるべきこと、とも考えております。

との概念的な話はさておきまして、4 月に新バージョンをリリースするのですが、その後遠からず、医中誌 Web の検索結果から機関リポジトリへの直接リンクを実現したいと考えています。皆様のご協力を頂ければ幸いです！

4 月リリース予定の医中誌 Web(Ver.5)

次号
予告

【特集1】いよいよ年度末、ワークショップ報告

2/17「名寄せのこれから」WS・2/18DRFtech-Kumamoto

【特集2】明日に向かって！最新取り組み特集

今年度を振り返っていくつかの機関リポジトリの最新取り組みをご紹介します。

ほか

編集後記:【特集1】のお題、あれもこれも聞きたいとたくさん用意していたのですが、何と最初のお題で予定時間超過！「女子会」パワー恐るべし…しかし、メンバーの皆さんのおかげで楽しかったです♪(AbMon)